

『意外と知られていない、「溶連菌」の怖さ』

風邪の症状に加えて原因不明の紅い発疹など…溶連菌の疑いがあります。

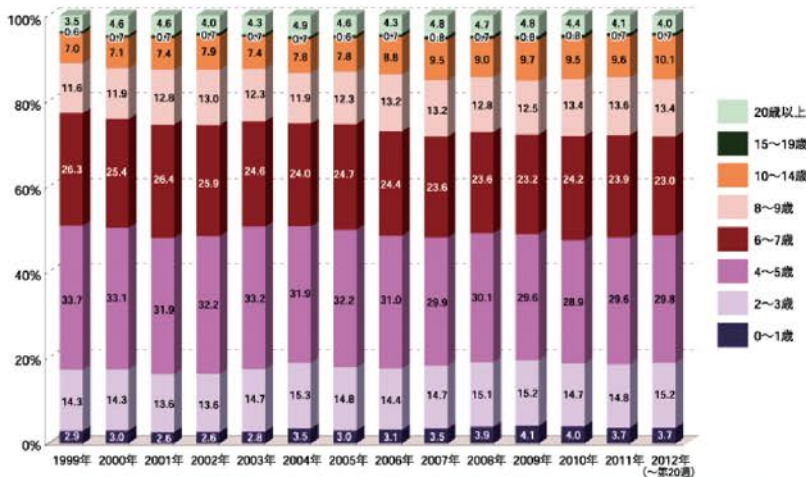
2017年過去最多の患者数を更新し、昨今話題となった「人食いバクテリア」と呼ばれる「劇症型溶血性レンサ球菌感染症」。このバクテリアを含む「溶連菌（＝溶血性レンサ球菌）」は、保育園・幼稚園・小学校などの教育期間や家庭内など、集団生活の中での発症例が多い感染症です。3歳～15歳（※諸説あります）の患者数が多く報告されており、対象年齢の子を持つ親御さんは正しい知識をもっておく必要があります。

感染のピークは冬季、および春から初夏頃です。潜伏期間は2～5日、急性期（発症当初）に最大の感染力を発揮します。症状は、38℃～39℃の発熱、喉の痛み、咽頭発赤、莓状の舌などの症状（しばしば頭痛や嘔吐も）が現れます。症状が

風邪と似ていますが、「咳や鼻水がほとんど出ない」「紅い発疹がでる」という差異があります。

治療には、主に抗生物質を服用しますが、完治したとの自己判断は禁物。必ず医師の診断を受けるようにしてください。じつは溶連菌は、子どもで5%～20%、大人で約3%の保菌者がいるとのデータ（※周囲の罹患状況等にもよります）もあり、体内に侵入しても健康な状態であれば、免疫力により死滅、または発症しないとされます。予防接種はありませんが、日頃から手洗い、うがい、咳エチケット（マスクの着用、咳やくしゃみなどの際ハンカチや袖で口を覆うなど）を徹底し、体調管理に留意することが、いちばんの予防と言えます。

A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎年別・年齢群別割合（1999年～2012年第20週）



出典：国立感染症研究所 Web サイトより引用



文 宮本 貴司 text by Takashi Miyamoto

Profile

株式会社デルフィーノケア 代表取締役

1972年生まれ。日本文学部卒業。事業会社でITサービス、地域コミュニティーサイトなど新規事業上げを経験後、2015年12月に代表取締役に就任。「感染症ゼロを目指す」のコンセプトのもと、警察、病院、薬局、学校、オフィス等に「まるごと抗菌」を提供しています。